

短歌を作ろう

短歌とは、五・七・五・七・七の五句三十一音からなる、我が国独特の定型詩です。このきまりをふまえて短歌を作ってみましょう。

初句(五音)

二句(七音)

三句(五音)

くれなるの (イ) 二尺伸びたる にしやく 薔薇の芽の ばら

四句(七音)

結句(七音)

針やはらかに はり 春雨のふる はるさめ

(正岡 子規)

1 題材を探そう

短歌の題材には様々なものがあります。日常生活の中でふと気づいたこと、感動したこと、登下校時に見つけた風景、学校行事で体験した出来事など、身の回りから探してみましよう。(想像して作るのではなく、自分自身で見たり、聞いたりした体験をもとに作ってみましょう。)

2 取材しながらメモをとろう

大きな場面から小さな場面へ目を働かせ、場面や様子が目

に浮かぶように、細かいところもていねいに記録しておきましょう。

3 メモをもとに、音数に合わせながら短歌を作ろう

(1) 感動の中心を考え、リズムや表現を工夫しましょう。

(句切れ・比喩・体言止め・倒置法など)

(2) 情景と心情をうまく組み合わせてみましょう。季節や時間、固有名詞などを入れると、臨場感が生まれ、イメージもはっきりしてきます。

(3) 自分で発見したものを自分の言葉で表現することが大切です。自分らしさ(個性)を出しましょう。

〈メモ〉

スタート前はいつものように緊張していた。僕は二〇メートル走で一位になることができたのがとてもうれしかった。ゴール前、敵と並んだ。僕は、負けてたまるかと最後の力をふりしぼって頑張った。

〈作った短歌〉

スタート前 高まる心を おさえつけ

ピストル音に 耳の傾く

負けまいと 最後のカ ぶりしぼり

テープを切った ときのよろこび

* 文集「こだま」に掲載された短歌の中から三首紹介します。作品とその解説を読んで、短歌を作るときの参考にしましょう。

いざ勝負線香花火消えるまで

みんな真剣息をひそめて

夏の夜の風物詩の花火。はなやかな花火を一通り楽しんだ後、最後に興じるのが線香花火です。それまでとは違って変わった静寂の中で、細い花火を手に皆の顔は真剣そのものです。

父さんの土産のメロン香り立ち

メロンは、北海道出張のお土産だったのででしょうか。一家団らんの和やかな雰囲気を感じられる一首です。「父さん」という優しい表現も、この歌にはぴったりにです。

いつの日か輝く自分想像し

瞳を閉じる迷いの季節

中学三年生は、人生における一つの分岐点です。その中で自分の将来に様々な不安や悩みを抱えながらも、いつかきつと輝いてみせるといふ気持ちを感じられます。

* 文集「こだま」にはこの他にもたくさん短歌が掲載されています。ぜひ読んで参考にしましょう。

〔メモと短歌〕

年組 番 ()